

広報

2017

3

No.146

発行日 平成29年3月13日
発行 那珂市
編集 秘書広聴課広報グループ
〒311-0192
茨城県那珂市福田1819-5
E-mail hisho-k@city.naka.lg.jp
U R L <http://www.city.naka.lg.jp>

なか

目次 Contents

水島 ㊟	… 2
お住まいの耐震性能、気になりますか？	… 6
平成28年中 救急と火災の概要	… 8
まちでともに暮らす	… 10
いい那珂暮らし応援団	… 12
那珂ふるさと大使通信	… 13
消費生活センターです	… 15
那珂市内放射線量測定状況	… 21
まちの話題	… 22
Information	… 24
さわやかさん ほか	… 28

那珂
暮らし

水鳥

26

—— たつつあいの人物像を探る ——

皆さんは「たつつあい話」を知っていますか？那珂市の額田地区に古くから伝わる昔話で、「たつつあい」と呼ばれるとんちにたけた男の笑い話です。そのユーモラスな話はいくつもの物語があり、今なお語り継がれ私たちを楽しませてくれます。

そこで今回は、その物語の主人公「たつつあい」の知られざる人物像に迫ってみたいと思います。

たつつあい話の分布

現在、県内多くの市町村で、地元で長く語り継がれている民話が1冊の本にまとめられています。そのような文献からその地域に残されている民話を知ることができます。那珂市においては平成10年に当時の那珂町教育委員会が『那珂町の民話』を発刊していて、その中に「たつつあい話」が収録されています。

そこで、県内市町村の民話の本などを中心に資料を探ってみると、那珂市を含む9つの市と村（つくば市・小美玉市・水戸市・ひたちなか市・常陸太田市・常陸大宮市・高萩市・東海村）にたつつあい話を見ることができました。中でも『うその本』『筑波山のつつ

かえ棒』『クリ這う藤』の話は、県北部一帯と広い範囲に伝えられているようです。また、常陸大宮市には、たつつあいの名は出てこないものの『ハチヒキノ馬』と内容がそっくりで、おそらくたつつあい話が基になったと思われる話もあります。

たつつあいが住んでいたとされる額田はその昔、棚倉街道が通り宿場町として栄えていたので、多くの旅人がここでたつつあい話を聞き旅の途中に語られ、広まっていったのではないかという想像ができます。そのことを意味するように、棚倉街道沿いにあたる旧水府村、旧里美村（ともに現・常陸太田市）を中心に那珂市から棚倉よりの県北部に多くのたつつあい話が残されています。

また、口承ならではの「たつつ

あい」の呼び名や物語の内容の微妙な違いも見られ、いかに多くの人たちによってたつつあい話が伝えられてきたのかが分かります。（次ページ、たつつあい話分布一覧表を参照）

県外を見てみると、福島県福島市、いわき市、郡山市、相馬町に『ぼら吹き息子』として、『筑波山のつつかえ棒』と同じ話が伝わっています。ただ、常陸大宮市と同様にたつつあいの名は出てこず、「あるところにほらの名人がおった。」という形式です。また『お寺の鐘』は同じく福島県いわき市勿来と群馬県水上町に残っており、こちらもほらの名人の話として語られています。そして、栃木県栗野町には『うその本』の類話で『嘘つき棒』という話があり、本と棒の違いだけで内容はほぼ一致します。

しかし、以上にあげた話は、関西地方や、東北部にも見られ、県内のようにたつつあい話として確立しておらず、笑い話の中の一つとして認識されているようです。そうすると、たつつあい話としての分布は県内では確認できなかったこととなります。



■ たっつあい話分布一覧表

タイトル	市町村	内容
うその本	県北部一帯(水戸市含)	額田のたっつあいが水戸市の殿さまに呼び出され、「うそをついてみる」と言われる。うその本を家に置いてきたと言い、殿さまはたっつあいに馬を貸して家へ帰すが戻ってこない。使いをやると「これが私のうそつき」という。褒美に馬をもらう。
	東海村・常陸太田市・常陸大宮市・水戸市	褒美の馬 → 乗り逃げした馬 (この話の中では東海村での呼び名がたっつえ)
クリ ^は 這う藤	県北部一帯	額田のたっつあいの名が有名になり、次々とうそ比べに人がやってくる。ある日たっつあいは「クリも這った藤を見せてやる」と言って裏山の小さい栗の木に絡まった藤を見せ、うそ比べに勝った。
	東海村・常陸大宮市	「クリ ^は 這う藤がある」と自慢して歩き、疑った人々が見に行く。 (この話の中で、美和村での呼び名はたっぺい)
ヒョウの皮	ひたちなか市・東海村・常陸大宮市・那珂市	ある人が屋根をふき替え「ごまん ^{かわら} 瓦」と自慢。たっつあいも負けじと「自分の家の屋根はヒョウ ^{かわら} 瓦」と自慢。見てみると空俵でふいてあった。 ※千葉県船橋市の『重右衛門話』と類話
何でも金	常陸太田市	たっつあいが「うちのものは何でも金でできている」と自慢。実は金(カネ)のなべが1つしかなく何でもそれで煮炊きしているだけで、話を聞いた人は裕福な人だと思いこんだ。
ほらくらべ (那珂町の民話では『飛ばされたお寺の鐘』)	那珂市・東海村	よその村のうそ名人(よそのたっつあい)とたっつあいのほらくらべ。 よそ「風で釣り鐘が飛ばされた」 た「裏の蜘蛛の巣に引っかかっているのがそうかもしれない」 たっつあいが勝った。 ※笠間市のうその名人の話と類話
	ひたちなか市	よその村のうそ名人 → 紀州の殿さま
	常陸大宮市	よその村のうそ名人 → ある人、お寺の鐘 → 石臼 ^{うす}
ほら吹き息子 (那珂町の民話では『筑波山のつかえ棒』)	県北部一帯・つくば市	西国一のうそ名人が評判を聞いてたっつあいの家を訪れる。子どもがいたので「父は？」とたずねると「筑波山がでんぐり返りそうなので線香三本持って出かけた」と答え、子どもがそれだけのうそをつくのだからかなわないと逃げた。その子どもがたっつあいだった。
	常陸太田市	西国一のうそ名人 → うその修行者、筑波山 → 富士山、線香三本 → しんばり棒
	東海村	まだ子どものたっつあい → たっつあいの娘
紫の葉の植物	高萩市	水戸の殿さまに呼ばれうそをついて見ろと言われたたっつあいは殿さまの盆栽を見るなり「家には紫の葉の植木がある」と自慢。それはナスのことだった。
小ぶるまい	小美玉市	額田のたっさいが村役場へ行き「いつもうそばかり言っているので今度は本当のことを振る舞う」と言い小さな皿にあんこをのせて「これが本当の少々の小ぶるまい」と言った。
ハチヒキの馬	東海村	殿さまに「俺の家にはハチヒキの馬がいる」と自慢。そんなはずはないと見に行くと、馬の尾に鉢を引かせ「鉢引きの馬だ」と言った。
	常陸大宮市	内容はほぼ同一。たっつあいの名は出てこないが『東西の嘘 ^{うそ} 名人の嘘比べ』と言う話になっている。

物語にみる たつたつあいの人物像

さて、それではたつたつあいは、

物語の中でどのように伝えられているのでしょうか？私が知るたつたつあいは、「額田に住む嘘つきの名人」ということくらいでした。しかし、那珂市に残るたつたつあいの話をもう一度読み返したり、先ほどあげた県内各地に残るそれらと比較することでたつたつあいの人柄や、意外な一面を垣間見ることが出来ます。那珂町の民話の監修者である藤田稔氏は、その中で「たつたつあいという字には、多才とか達才とかの字があてられ、才のある人・知識人という意味ではないか。」と述べています。確かにどの話からでもたつたつあいの非凡な才能を知ることが出来ます。

例えば、『筑波山のつつかえ棒』では、まだ子どものたつたつあいが西の国のうそつき名人を言い負かしたり、『うその本』では殿さまの要求に応え見事にうそをつき褒美に馬をもらっています。また、『欲がない』では、金持ちがどう計算したらいいか判らないので、てんさん師（年貢などの計算をする人）に頼んだ程の難しい計算の

結果を、たつたつあいは前もって知っており、金持ちをぎゃふんと言わせたりと、なるほど才のある人と言えるようです。

しかし、前章でも述べたように、地域によって話の内容が微妙に変わってくると同時に「たつたつあい」の意味も違ってきます。

その例を挙げてみると、東海村では「達才（たつたつあい）やってみろ」というと、「うそをついてみる」という意味になり（日本昔話通観）、旧内原町（現水戸市）ではたつたつあいには、口から出任せという意味があり、真意性のない話をするという「たつたつあい話ばかりしている。」と言ったそうです。（うちほらの昔語）

さらに興味深いことに、この2か所に、たつたつあい話に共通する点があります。先ほどあげた『うその本』で、たつたつあいは殿さまから褒美に馬をもらったと那珂市では伝えられています。ほかのほ



額田のたつたつあい話『うその本』（『那珂町の民話』収録）

画：檜山栄氏

とんどの地域でも同様であるのに、東海村、旧内原町、ほかわずかな地域でたつたつあいは殿さまの馬を乗り逃げしたと語られているのです。（日本昔話通観・内原の昔語り）ストーリーは一緒でも、殿さまから褒美をもらったのと、殿さまの馬を乗り逃げしたというのでは、たつたつあいに対するイメージが変わってきます。前者では英雄的に捉えられているのに対し、後者はただ図々しいお調子者のように感じられます。

しかし、もしかしたらお調子者のたつたつあいこそが本当の姿なのかもしれません。というのは『天にのぼる』では、「利口もんだけつと百姓仕事はあんまりやる方ではなかつた。」（那珂町の民話）と書かれています。結局自分の労力をほとんど使うことなく畑を耕してしまいました。かと思うと『欲がない』では、強欲で人使いの荒い金持ちの百姓が人手がなくて困っていたところ「たつたつあいは働きの者だつちうので頼みに来た。」（那珂町の民話）とあります。単なる矛盾とも思えますが、自分ではあまり働かなくとも要領よく仕事をこなしていくたつたつあいの姿が村人には働き者に見えていたのかもしれない。また、「し

いたけ』では、村人がせっかく採ったしいたけを得意のほら吹きで横取りしてしまうという一面もみせています。（那珂町の民話）

これだけしつちゅうホラばかり言っていれば、村人から相手にされなくなってしまうそうです。たつたつあいの場合は違っています。むしろ村の若者から慕われ、頼りにされていました。それは、『縁起かつぎ』の中で腹を立てた庄屋に困った若い衆が、たつたつあいのもとに相談に来ていますし、『大ほら吹き大会』ではほらの知恵を借りて3人の若者が入れ替わりやってきました（『那珂町の民話』）。貧しい生活を強いられる中、ある程度楽な生活ができた庄屋や商人、そして殿さまにまでギャフンと言わせることのできたたつたつあいは、ときには村人に一杯食わせて自分で利益を得ることもありましたが、いざとなれば弱者であった村人を助ける英雄的存在だったのでしょうか。

先ほどの『うその本』の結末の違っても、たつたつあいの信望者らには馬を褒美としてもらったと語られ、そうでない地域では誇張されることなく語り継がれたのかもしれない。

たっつあい話を収録している
『那珂町の民話』
のご案内



現在、那珂市歴史民俗資料館で好評販売中です！

定価：700円（税込）
たっつあい話のほか、伝説、昔話も収録しています。

発行
平成10年3月
那珂町教育委員会



問い合わせ
歴史民俗資料館
☎297-0080

言いたい伝えの中の たっつあい

たくさんの話を残したたっつあいですが、果たして伝説の中だけの人物なのでしょうか。

額田地区では、たっつあいの姓は大谷であったと伝えられています。故老の言い伝えによると寛政年間（1789～1801）水戸六代藩主徳川治保のころ、額田に大谷達才というとんちにたけた者があり、達才の名は近郷によく知られていたそうです。また、昭和ごろ、当時の引接寺の住職によると、「文政3年（1802）辰年正月二三日没の大谷与市郎の墓標『才広院大誉式儀居士霊』は時代から見てもたっつあいのものかもしれない。」（わが郷土）と実在

説に積極的です。

しかし、たっつあい話の研究家であった大録氏^{おあき}は、「額田のたっつあいは、だれと判断する資料がみつからない。」（額田たっつあい話）としているし、藤田稔氏も「寛政時代の人で相当学問のあった医者らしいという説もあるが、人物を特定することが困難であり、棚倉街道を通った諸国の人々の残っていた話が語り継がれ集約されたのではないか」（那珂町の民話）と述べており、両者とも実在説には消極的です。そして、『うちはらの昔語り』では額田のたっつあいについて「うそつきの話は全国的で、額田のたっつあいなどは、額田に結びつけてお墓まであるとしているが、実際には地名を合わせただけのものである。」と実在

説を否定しています。

確かに残されている話は笑い話として大変よくできており、大谷達才による実話とは考えにくい話もあります。また『ヒョウウの皮』の話が千葉県船橋市では『重右衛門話』として伝わっているように、同じ内容の話がたっつあいではなく別の嘘つき名人の話として残っていることを考えても、額田に街道が通り、宿場町であった性質上、藤田氏の言うように、いろいろな話が集約したと考えた方が自然なのかもしれません。

しかし、古くから伝わるたっつあい話が、今なお私たちを楽しませてくれるのは、その存在が正しいものであるからだと思います。テレビや本の中のヒーローやヒロインの正体が物語の中で明かされて

いないのと同じように、たっつあいも大谷達才なのかもしれないというところで、より興味や関心が持てるように感じます。ここは、皆さまにもお調子者のヒーローたっつあいの実在説を否定しないで、今後も物語を楽しんでいただけたらうれしく思います。



たっつあいの墓とされる墓石
（額田南郷 引接寺）